

## 中国で話題になっている中国人留学生の殺害事件に関する 「文化」と「法律」の違い

### ◆中国で話題になっている「江歌さん殺害事件」

まず、不幸な話から書いてみよう。11 月 20 日の環球時報に昨年 11 月に起きた中国人留学生の殺害事件に関する内容が書かれていた。その記事には「日本人の見方はなぜ中国人と異なるのか」と表題がつけられていた。

さて、このような記事がいきなり掲載されても、ほとんどの日本人には何のことだかわからないであろう。そこで事件を当時の新聞などの記事に書かれた範囲で追ってみよう。昨年 11 月 3 日、中国人留学生の江歌さん（当時 24 歳）は、東京都中野区のアパートでルームメイトの劉さんと同居していた。劉さんは、それまで交際していた陳世峰さんと別れたが、その後ストーカー被害にあっていたり、あるいは嫌がらせを受けたりというような状況であった。この日も、劉さんが外出から戻って先に部屋の中に入った時に、ストーカー行為をしていた陳世峰と江歌さんが自宅前で鉢合わせし、江さんと陳さんの間で言い争いの末、陳さんがナイフで何回も刺して江さんを殺害したという事案だ。

この事件に関して、今年の 12 月 11 日に判決が出るとされており、その中において、中国の報道が過熱している。冒頭に紹介した環球時報だけでなく、亜州通信など様々な新聞や雑誌にトップの扱いで報道されているのである。

この報道に関して注目を集めている理由は三つだ。一つ目は、「善良な女性が友人の身代わりになって殺されたこと」である。特に被害者となった江歌さんが母子家庭出身で、頑張って留学し、将来の道が開けたところで、中国人留学生に殺されてしまったという、娘を失った母親の悲痛な思いに胸を打たれたという同情によるものだ。この方式の報道は日本でもよくあるので解説をする必要はない。同情的で、かわいそうな家庭で頑張った人が、突然悲劇に見舞われた場合の報道の過熱ぶりは、日本も中国も同じなのである。

第二に江歌さんの母、江秋蓮さんの行動だ。「娘は私の人生のすべてだった」と語る秋蓮さんは今年 8 月から「陳世峰の死刑を求める署名活動」を中国で行っている。昨年一人っ子政策が廃止になったとはいえ、現在日本に来ている中国人留学生の多くは、「一人っ子政策世代」である。その一人っ子が、留学先で悲劇にあったということなり、なおかつその犯人

も中国人留学生、それもルームメイトとの失恋話に巻き込まれて何の罪もないのに被害に遭ったとなれば、このような署名活動に理解を寄せる人も少なくない。その署名活動では、200万人を超えるネット署名を集めているほか、支援の寄付を行った者もいる。その一方で、「娘の死を口実に金儲けしている」「日本に留学するなど売国奴だ」といった批判も寄せられているということである。

そして第三に、この事件の不可解なところである。通常ストーカー被害があったり、あるいは嫌がらせなどがあったりした際、日本人ならば警察に連絡をするということになる。日本で話題になるのは、警察に相談したのに警察が動いてくれなかったというような事件がほとんどであり、桶川ストーカー殺人事件や、昨年の小金井の地下アイドル傷害事件などもその類に属するものである。しかし、この事件で不可解なのは、当の本人である劉さんが、被害者である江歌さんの勧めにも関わらず、日本の警察に相談することもなく、また事件直後の警察の取り調べにおいても、「犯人に見当がつかない」など不安定な発言をして、被告人の陳世峰をかばうような発言をしているということである。そのうえ、犯行時は家に引きこもって江さんを全く助けようとしなければいか、事件後に中国に戻っても江さんのお母さんに連絡もしなかったという。この劉さんが口をつぐんでいることによって、取り調べも不明な部分が多く、いまだに不確定な部分が少なくないということなのである。

#### ◆日本と母国の刑罰に対する考え方の違い

さて、『留学生通信』というこの文章において「一つの殺人事件」を長々と解説することはあまり好ましいとは思わない。もちろん日本語学校の皆さんは、このような事件を察知したら警察に相談し、万全な対策をとっていただきたい。今回は留学生三人の事件なので、どの立場にも留学生を置かないようにしなければならないので、そのような普段の生活のケアも必要である。

もう少しこの事件のことを続けると、この事件、日本の司法制度でいえば、無差別殺人でもないし、また口論をしていることからして初めから殺人の意志があったとも考えにくい。口論で激高してついつい殺してしまったというような方向で日本の弁護士は弁護をするであろう。ということは拡大被害の可能性もないので、「無期懲役」や「有期刑」になる可能性もあり、江さんの母親が200万人の署名を集め求めている「死刑」は、なかなかあり得ないのではないかということになる。このことに関して環球時報でも「江さんの母親は、陳被告の死刑を求めて署名を集めているが、日本の法律で殺人罪は最高で無期懲役刑が一般的である。犯罪の残酷さ、被告の態度、社会的な影響などが考慮され、死刑判決が出ることもあるが、被害者は複数であることが多い」と記載されており、「中国では非常に重大な行為であって初めて犯罪として成立する。犯罪とされれば刑は重くなる。しかし、日本は犯罪の大小にかかわらず、罪は罪として扱われ、罰は比較的軽くなることが多い」と指摘されている。

さて、この問題で注目しなければならないのは、留学生における母国と日本の「司法の制

度の在り方の違い」ということの認識であろう。日本の場合は「常識」という言葉で片づけてしまうことが一般的で、そのために、「どれくらいの罪になるのか」ということや、「司法の場においてどのような判断が下されるのか」という法的な会話として成立しない。このことは、「日本ではなかなか死刑にならないから犯罪をしやすい」などと誤解されてしまう場合もあるし、一方で、この記事にあるような江さんの母のように、「日本の司法が甘いから復讐を遂げられなかった」と日本に対して悪い感情を抱くことも少なくない。日本の場合、刑罰というのは一つの基準でしかなく、犯罪ということに関しては、これを社会が許容しないということが、より大きな犯罪の抑止になっているのである。「恥」の概念とか、「社会の目」という感覚があり、「悪いことをしてはいけない」「他人に迷惑をかけてはいけない」というような、不文律的な合意が形成されているためである。これは道徳律であり、または常識である。その常識の範囲の中で治まる人が少なくないので、刑法の適用などは最小限で済まされることを問うようになっているのである。

同時に、その刑罰に関しても「復讐として刑罰を適用する」という古代ハンムラビ法典の「目には目を歯には歯を」というような「報復刑」という考え方ではなく、「環境が良ければ犯罪をすることはなかったはずだから良い環境において、再度社会復帰のチャンスを与えるべき」という「社会刑」的な考え方が主流になっている。もちろん、まだ刑法の中において死刑が存在するので、その意味では報復刑の考え方が残っているものの、それは更正の可能性がないというような場合に限られるとされているのである。

これらの考え方から、日本とほかの国とは必ずしも刑法や刑罰に関する考え方が同じではないし、また法律に関する考え方も全く異なる。その意味において、それらの内容をしっかりと認識させなければならない。

もちろん、日本語学校の先生方にそこまで要求することは不可能であるが、しかし、日本に留学し、日本において生活をする以上、日本の文化や制度を学ぶことは必要であると考えられる。幸い JaLSA においては、そのようなことに関して詳しい顧問も少なくないので、相談したり、講習なども活用したりすべきではないかと考える。

## ◆日本の生活習慣になじむことが安全と留学効果増大の秘訣では

もう一つ考えなければならないのが、「文化の違い」ではないか。このような事件があった場合、どうしても考えるのは、「劉さんがなぜ警察に相談しなかったのか」ということではないか。これは単純に、警察に対する信頼の問題であるが、その「信頼」が、中国における経験から警察を信用しなくなったのか、あるいは日本を信用していないのかは不明である。このことから考えられるのは、留学生である劉さんは、「日本の文化になじめなかったのではないか」ということではないか。

日本の文化や生活習慣になじめない生徒ということに関しては、多くの日本語学校の先生方にも経験があるものと思われる。本来、日本語を学びに来たり、あるいはその後、大学や

専門学校で日本の技術や日本の仕事を学びに来たりしていても、それは総じて日本の文化を学びに来ているものにすぎない。

海外で生活している場合、朝、目が覚めて「グッドモーニング」と思うか、「おはよう」と思うか、あるいは「<sup>ざあおしやんはお</sup>早上好」と思うか。意外と簡単なことなのであるが、経験上、これが切り替わった時に「外国になじめた第一歩」と思うようにしている。そこまではあくまでも「お客さん」という感じで、外国における仕事などは外国の習慣やペースで進めるものではないのである。これは留学生も同じで、かなり冷たい言い方をするが、日本において日本語と日本の文化を学ぶ以上、日本の生活習慣と日本の慣習に慣れなければならないし、日本の文化に合わせた頭に作り変えなければならない。今回少々きつく書いてしまったのは、上記の事件が、そのような「頭の中の文化や習慣の作り変え」がうまくゆかなかったことによって、悲劇が生まれている実例だからである。まさに、留学生において最も必要なものは、日本の良いところも、悪いところ（自分には合わないと思われるところ）も含めて、日本流の生活習慣に慣れることではないか。そして日本語学校は大変ではあると思うが、留学生にそのことに関してアドバイスをを行い、なるべく早く日本の社会に溶け込め、日本社会における危険を排除できるようにしなければならないのではないか。そのように行うことそのものが、留学生自身を学びやすい環境に置くことができる第一歩であり、なおかつ日本社会の中で安全に、そして有意義に暮らすことのできる手法であるということではないか。

もちろん、イスラム教徒が酒を強要されるような場合は、それを拒絶することは当たり前のことである。日本にいるからといって、宗教や信仰を裏切る必要はない。しかし、生活の習慣の中において、そのような極端な例を除き、日本社会を学びなじむことができなければ、結局、犯罪に加担してしまったり、あるいは日本に来ていても日本語も専門知識も学ぶことができなくなってしまうのではないかという気がしてならない。

日本に留学して悲劇に巻き込まれるようなことを避けるだけでなく、日本において最も効果的に学びたいことを学び、そのうえで日本を好きになってもらうために、今回のこのような事件が教えてくれることは少なくないのではないか。